
Despair と言う名の希望。

貂寡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Despairと並ぶ名の希望。

【Zマーク】

Z0850E

【作者名】

貂寧

【あらすじ】

イジメは人間の弱さによつて汚く汚れている。そんなイジメを受けている庵崎はある日一人の男性に会い恋に落ちる。イジメによって産まれた恋の話。

君は何で泣いているんだい？僕が悪いのかい？何で笑顔で居てくれないの？

ほら空を見て、『ちゃんとみんなにも星が輝いているのに、ねえ何で泣いているの？

僕には分からないよ、君が泣いているわけが

私だつて分かんないよ。何で泣いているのか。確かに星は綺麗だよ。だけど心の中がおかしいの、ねえ助けてよ。私をここから出して、そして美しい物をたくさん見せて。君が綺麗だと思うものを・・・

黒板から落ちた黒板消し、辺りには色とりどりに混ざりあったチョークの粉が散らばっている。黒板を見れば、当番が消し忘れた薄い文字が残っている。

【Despair『绝望』】と 私は教室を後にする。何とも言えないような静けさが最終下校時間を過ぎた校舎には広がつ

ていた。

高校に入つたばかりの頃はこんなことを考えたり感じたりはしなかつた。毎日か、嵐のように過ぎて行く。入学式、対面式、部活動紹介、そして、じく普通の授業。どれも中学生だった私には新鮮だった。

しかし、やはり飽きはくる。特に私には友達と呼べる仲間がない。それは、致命的な入学ミスだった。そして今、私は毎日同じ事を繰り返す。授業を聞き、ノートをとりあえず取り、部活には行かないで帰宅する毎日。何とも平坦で平凡な毎日。こんな生活は惨めだとも思つたし、抜け出したいとも思つた。だけど、もう遅い。私にはもう帰る場所すらないのだから。

いつの間にか辺りが変わつていった。私はクラスに居ても、存在を抹消されるようになつていて。時々、大事にしていた物が無くなつたりした。これつて、イジメのかなと考えたりもした。だけど、どうやって解決するのか友達のいない私には解らなかつた。

無視していたらもつと、イジメは酷くなつていった。私から話しかける事はほとんどなかつたが本当に困つた時に何度も話しかけたりするが、よくシカトされるようになつた。

放課後帰ろうと、靴を履くと画ビヨウが足の裏に刺さつて血がでたりした。

授業で必要な物が持つてきただはずなのに無くなつた。

そんな事が続き、私の岡太かつた精神も流石に病んでいった。

いま、校門を歩み出て駅へと向かうが、徒步25分は慣れてもきつかった。

出会いなんて早々無いと俺は別れた彼女にひっぱたかれた頬をそつ

と擦る。やつぱり女に叩かれても本気だと痛いものだと、つくづく気付かされた。ポケットからケータイを取り出す。新着メールなし、これほど寂しい事はない。ケータイを開けても何もない、何だか切ない。俺はケータイに目を落としたまま校門を通り過ぎる。

私は人の気配に気付かなかつた。ただボンヤリと空を見上げていた。

俺は坂道をぐだる。よく前方不注意で友達に叱られるが、まさかこの癖が彼女との出会いとなるとは思つても見なかつた。

【コンツ】

誰かが私にぶつかってきた。私はよろけて倒れそうになる。しかし、ぶつかってきた誰かが私の手首を持って支えてくれ、落下を防ぐ。

本当に迂闊だつた。こんな所で人が立ちっぱなしで空を見上げているとは思わなかつた。しかも、目に飛び込んできたその顔は美しさと幼さを兼ね揃えていた。

私は、ぶつかってきた相手を見た。整った顔を持つている男性だった。
しかし、見たこともない人だった。

だけど、俺は私は思つた。この世界にも神様は居るんだろうて、そして私の俺の目のまえにいる彼女彼は誰なのだろうと

そう、俺は恋をした。失恋して何も受け入れる物が無くなつた俺にはこの出会いが運命だとしか思えなかつた。

私は恥ずかしくなつた。この場から居なくなりたいとも思つたし、いま自分が考えていた事を悟られたくないとも思つた。

俺は、彼女が顔を赤くしているのを見て掴んでしまつた手首をそつと離す。

「ごめんな。俺、よそ見してて。ついぶつかつた、ホントすまん。」

彼の声は心地よく私の耳に吸い込まれていつた。何時からだろう。こんな心地よい声を聞かなく成つたのは、私は顔が熱くなつていく感覚をおぼえた。もしかして、一目惚れ？自分で考えた事を首をふ

り考えないよ」つづる。

「すみませんです。本当にすみません。私の方が悪いんです。それでは、失礼します。」

彼女の声は耳に吸い付いて離れなかつた。しかし、その声とは裏腹に彼女は逃げるよう立ち去りつとする。

「まつ待つてくれ。」

俺は彼女の手首をもう一度掴もつとした。

「いやです。」

彼女はすたすたと歩いて行く。

私は恥ずかしかつた。今自分が考えていたことや顔を赤くしている事、それを悟られたくなかつた。

けど待つてくれと言わたときはドキリとしたが、なるべく私は人に関わりたくないので逃げる。

彼女に俺は嫌われたのか。待つてくれと言つた時も微動だにもしない様子だつた。彼氏でもいるのだろうか？あつ、名前聞き忘れた。俺つて本当にどじだよな。友達からもよく言われる。彼女が立ち去

つたいま、俺の目の前には何も無くなつてはいなかつた。ラッキー。俺はそう思うなりすぐに彼女がいた場にしゃがみこむ。

もう一度彼女に会えそうだ。そつと赤いケータイを手に取る。

家に帰つて私は愛用の携帯電話を取り出そとポケットを探る。しかし、どこを探しても見つからない。どうして無いのだろう?確かに学校を出る時は私のポケットに存在していた。けど今は無い。もしかして、あのぶつかられてこけそうになつた時に落とした?

俺は彼女の名前を知つた。庵崎珈誉そうケータイに書いてあつた。名前が分からないと俺は届けられないなと悪い気がしながらケータイを開けた。そして彼女のクラスをしつた。1年3組。俺は2年なので年が違う事に腹がたつた。

携帯電話を探してへとへとなつた私は教室でちよこんと座つていた。

よくケータイを落としてくれたものだ。
神様はおやさしい。

俺は1年の教室がある3階まで一気にかけあがる。廊下には1年どもがわんさかいる。3組は以外と階段から距離が離れてなくすぐに見つけて覗き込む。端の方に彼女がいたがこっちには気付いてない。名前は知つているが今叫ぶと誤解を呼びかね無いから止めてお

く。辺りの女子がなんか俺を見て話題にしているらしい。そんなに可笑しいか？

私は女子達が異様にうるさかつたので、睨もうと顔を上げた。しかし、話題に上がっている奴はどんなやつかと教室の入り口に目を向ける。そこにはどこかで見たような男性が立っていた。

彼女が気付いたようなので手を降つてみる。

「あー」

彼女は辺りを気にせず大声を出しが、辺りの人たちは微動だにしない。なにかおかしい。

私は彼が誰だか思いだした。昨日、ぶつかってきた人だつた。もしかしたら私の携帯電話を知つて要るかもしれない。

彼女は俺に近づいてきた。

「あのつ、昨日の人ですね。」

俺に向かつて話しかけて来る彼女はとにかく可愛く微笑んできた。俺はクラスのほぼ全員が見ていたのを知っていたので彼女の手を掴み教室から出る。

「ちょっと・・・」

彼女は戸惑うように辺りを見回す。しかし、彼女が見た方向の生徒達はふつと、偶然を装つて顔を背ける。

私は意味の分からぬまま彼に手を引かれていた。

“これは絶対にイジメだ”俺はそう確信した。クラスメイトの態度といい、彼女無視宣言でも出しているに違いない。彼女は悲しく無いのだろうか。俺はイジメを見る度に人間の弱さをしつた。だからイジメは許せなかつた。

私は彼に手を引かれて、屋上に連れて来られた。授業が始まる前のここは人が一人もいなかつた。

「あのー。」

私は声を出して彼に存在を知らせる。

彼女がいた事を忘れて黄昏ていた。声を出してくれなかつたら、そ

のままの体勢で何分でも黄昏ていただろう。

「すまなかつた。」

私は謝られてびっくりした。こっちが困ると言つせものだ。

「で、あなたは誰すか？私は庵崎です。昨日は本当にすみませんでした。」

俺はやつと、彼女の口から名前を聞いた。

「ごめんな。俺は2年の夜凪晴輝だ。あと、これお前のだろ？庵崎。」

軽く呼び捨てをしてみた。何だかやつた本人が恥ずかしくて死にそうだった。ポケットに入っていた珈誉のケータイを取り出す。

「あつ、私の携帯電話。夜凪さん本当にありがとうございます。な

にか、お礼がしたいのですが・・・」

俺はこの言葉を待つていた。

「じゃあ、1つ聞いていいか？」

「はい、なんでも」

彼女は笑顔で言つ。

「庵崎お前、イジメられているだろ？？」

珈誉は微笑んだまま固まつた。

「何で、と言ひより。私、イジメられてるなんて無いですよ」

彼女の視線が不自然にキヨロキヨロする。これは嘘を付いている時によくある癖だ。そう、彼女はイジメられている。

「冗談だ。けどメール友ぐらいには成らしてくれねえと困る。」

彼女は太陽のように暖かな笑顔を放つた。

「仕方ありません。分かりました、メール友だつたらオッケーです。」

俺は彼女にメアドを教えて午後の授業をさぼつて、空を見上げた。

あつと言つ間に授業が過ぎていく。こんなに速く授業が進んで行くのは私が夜凪に会ったからなのだろうか。彼はイジメがどうとか言つていたがもう気付いてしまつたのだろうか？私が半年ぶりにこの学校の人と口をきいたことに。

俺はいつメールをしようかと授業の間中ずっと考えていた。

寂しく最終下校を知らせるチャイムがなる。

いつものようにと靴を履くと下駄箱の中に小さく丸められた紙が入っていた。私はそれを手にとつて広げて見る。

『珈誉へ、昨日は』「めんな。ちゃんと明日も学校へこいよ。なんか嫌なことがあつたらすぐに俺に相談しろよ。じゃあメール待ってるからな。』

一方的な内容だと私は思った。メールアドレス位知っているはずなのに、何で私からメールをしないといけないのだろう。そんな屁理屈を思いながら頬を伝う涙をぬぐつた。そして私は学校を後にする。

いつもは、駅まで携帯電話を開かないようにしていただけど、夜凪が気になつて仕方なかつたのでメールをうつ。

『夜凪くん、お手紙ありがとう。メールでお返事をします。昨日の事は気にしないで下さい。私からのお願いです。』

私は短すぎる返事を夜凪に送つた。そしてまたあるきだす。数分もしない内に私の着信音では無い音が聞こえる。

俺は下駄箱にいた珈誉に話しかけられずに後を着ける形で後ろから様子を見ていた。すると、俺のケータイの着信音が鳴り響き珈誉が振り返つて俺の視線を奪い取つた。

振り返つたとき、私の視線が夜凪くんとぶつかった。びっくりした。後ろにいるとは思わなかつたからだ。

「夜凪くんも今帰りだつたんですね？」

私は唐突に下を向いて質問をする。

「そうだよ。とにかく、庵崎は電車で帰るのか？」

「はい。電車です。」

夜凪くんは恥ずかしそうに空を見上げていた。

「やうか。じゃあ駅まで一緒にに行こう。」

私はその言葉を聞くなり顔が熱くなつていつた。

「いいんですか？」

断りきれない自分に私は恥ずかしくなつた。

「じゃあ行こうか」

珈誉は顔を真っ赤にしていた。俺も顔が赤くなつているかもしれない。それだと恥ずかしい。

私は、夜凪くんの後を付いていく。

「何で、イジメられているんだい？」

夜凪くんが唐突に聞いてきた。

「何でイジメと言つ言葉が出てくるんですか？」

私が聞くなり夜凪くんは空を見上げた。

「今日、庵崎を尋ねて教室まで行つた時。クラスメイトが庵崎の事を無視してゐるなつて思つた。後、庵崎が俺と話す時、一回だけ俺に嘘を付いた。」

私の頬を温かいものが伝つた。

「イジメられているだろ?」

私は振り返つた夜凪くんに頷いた。

「やうか。理由はなんとなく分かるから言わなくて良いけど、今の自分を変えたいと思つたりはしないのか?」

夜凪くんは私の頭をそつと撫でた。

「変えたい。けど、出来ない。もう遅いんです。」

「いや、遅くはない。だつて、珈誉が話せない訳じゃ無いんだから。」

珈誉がびっくりしたよつて俺を見る。

「夜凪くん、いま、珈誉つて読んだ?」

俺はしまつたと空を見上げた。つい心の中の事を話したら知らないはずの名前を口ずさんでしまつた。

「庵崎、ごめんな。俺、ケータイの中を勝手に見た。だから教室に

行つた時も名前知つてて。その、本当に「めんな。」

珈誉はなぜかにっこりと微笑んでいた。

「そうだつたんですか。だから私の教室も分かつたんですね。じゃあ私も頑張つて事実を述べます。」

彼女はにっこりとしたまま語り始めた。

「私、イジメられているんです。イジメつて言つかは自信無いんですけど。無視はよくされるんです。」

彼女はまだ笑つていた。俺は見ている内に中学の頃を思い出していた。

「そして、夜凪くんに手を握られた時久しぶりに人と口をきいたことに気付きました。」

私は恥ずかしくなつて顔を下に向ける。

「ありがとう

俺はなぜかお礼をいい、珈誉を抱きしめていた。

「晴輝、私。」

珈誉が俺の名前を胸の中で読んだ。

「俺、珈誉が・・・」

「「好き」」

同じタイミングで放たれたその言葉は俺の心を揺さぶった。

私は晴輝の言葉にびっくりした。

君がなぜ笑うのかわかつたよ。嬉しい事じゃ無くとも笑うのはきっと辛いことを忘れるためなんだ。君がいつたあの言葉は俺の心を揺さぶった。そして俺思い出したんだ。君が閉じ込められていたあの世界が俺にも有つたってことを。忘れるところで思い出さしてくれてありがとう。さあ。これからはもっと綺麗な物を沢山見せてあげるよ。汚い物を見すぎた君に・・・

私を出させてくれてありがとう。嫌なことがある度に笑つてやり過ぎしていた私は恥ずかしい人だよね。それなのに、手を差し出してくれて嬉しかった、好きって言つてもらつて恥ずかしかった。けど本当にありがとう。そして、私にもっと綺麗な物を沢山見せてね・・・

私はワクワクしながら学校へ行く。夏休みも終わり、新しい空気が流れている。晴輝はサッカー部に入っていて、毎日のように応援していたら私もいつの間にか、マネージャーになっていた。けど、前のようなイジメはいつの間にか消えていた。そして、その跡には楽しい学校生活が待っていた。

「晴輝！頑張れ！」

楽しいと言つよりも楽し過ぎる毎日。

俺は珈誉の応援で毎日の元気を『えられる。

珈誉に手を振ると珈誉はれくそうに振り替えしてくれる。珈誉のイジメが無くなつて本当に良かつた。

部活が終わる。俺達は一緒に帰る。オレンジを通り越して、藍色に染まつて行く空に星が散つている。

「珈誉、見て、星が散つて本当に綺麗だ。」

俺達はまた歩き出す。

(後書き)

久しぶりに恋愛を書きました。忙しくなってきた今日この頃ですが、頑張って行きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0850e/>

Despairと言う名の希望。

2011年1月1日14時59分発行